

共通語彙基盤

氏名

情報交換パッケージ (IEP)

(ドラフト v.0.2)

平成26年9月30日

目 次

1. 本 IEP の目的	1
2. データ項目	2
3. IEP 活用の流れ	5
3. 1 新規システム構築の場合	5
3. 2 既存システムの場合	5
3. 3 注意事項	6

図 表 目 次

図 1 IEP を介したデータの連係	1
図 2 主なデータ項目	2
図 3 詳細データ項目	3
図 4 英語対応、schema.org 対応	4
図 5 新規システムでの導入イメージ	5
図 6 既存システムでの導入イメージ	6

1. 本 IEP の目的

氏名とは、個人を特定するための情報である。戸籍での氏名、戸籍に難しい文字があるため日常生活で使う氏名、通称等がある。また、ミドルネームを含む場合もある。

多くの業務において氏名の記述が求められるが、その形式は申請等のサービス毎に定義されている。例えば、氏と名を一体化した記述、氏と名を別々の欄に記述させる場合が混在し統一されていない。そのため、システム内で氏名データを保存していたとしても、申請を送る時に相手先毎に再入力もしくはデータ変換を行う必要がある。

そこで、氏名情報を交換する時の共通的な交換方法が必要となる。既存のシステムのデータ構造を変更する必要はないが、情報交換する場合には、相手先にあわせてデータ変換する時に参照すべきデータ一覧が必要となる。

本 IEP（Information Exchange Package:情報交換パッケージ）は、氏名情報を公開、交換、管理するために整備されたものである。

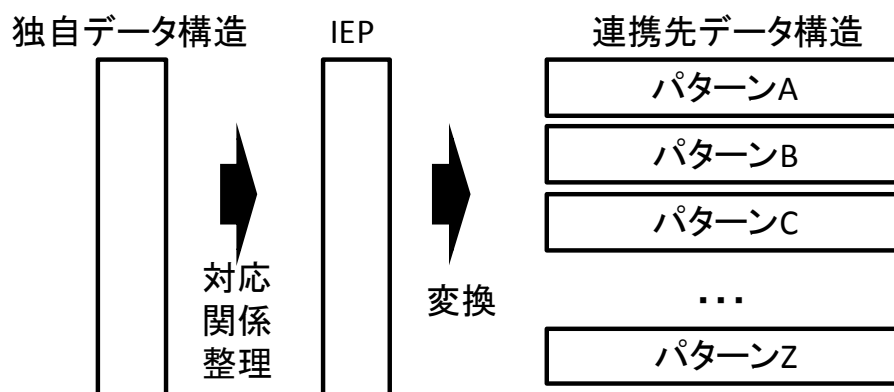


図 1 IEP を介したデータの連係

IEP 活用のメリット

- ・組織内外の多くのシステムと情報交換がしやすくなる
(調整やインタフェース改造が不要)
- ・情報項目に定義があるので、誰が見ても誤解なく情報が活用できる
- ・新規システム開発では、データ設計が標準的なデータでできる

2. データ項目

データ項目と記述イメージは、以下の通りである。灰色項目はその下に記述された項目を組み合わせることで、アプリケーションで自動生成できる項目である。ただし、構造化しないで、直接記入することも可能である。

データ項目名	説明	備考
種別	氏名の種類	戸籍名、旧姓、通称等の氏名の種類を記載
姓名	氏名 (姓、名)	構造化したデータをもとに自動生成することが望ましい
姓名 (カナ)	氏名 (姓、名) のカナ表記	構造化したデータをもとに自動生成することが望ましい
姓名 (ローマ字)	氏名 (姓、名) のアルファベット表記	構造化したデータをもとに自動生成することが望ましい
姓	姓	
姓 (カナ)	姓のカナ表記	
姓 (ローマ字)	姓のローマ表記	パスポートに合わせへボン式を基本とする
名	名	
名 (カナ)	名のカナ表記	
名 (ローマ字)	名のローマ字表記	パスポートに合わせへボン式を基本とする
ミドルネーム	ミドルネーム	
ミドルネーム (カナ)	ミドルネームのカナ表記	
ミドルネーム (ローマ字)	ミドルネームのローマ字表記	パスポートに合わせへボン式を基本とする

図 2 主なデータ項目

アプリケーションでは、図 2 のデータが利用者に見える。データベースでデータを管理する場合の IMI 対応は以下のとおりである。

ic:氏名					
	Ic:種別				「戸籍名」、「旧姓」、「通称名」等を記入。 日常的に使用する氏名は「氏名」とする。
	ic:氏名_姓名				姓と名を全角スペースで接続。
		ic: 氏名_姓			
		ic: 氏名_名			
		ic: 氏名_ミドル ルネーム			
	ic:氏名_姓名 (カナ)				全角で記入。姓 (カナ)と名 (カナ) を全角スペースで接続。
		ic:氏名_姓 (カナ)			全角で記入。
		ic:氏名_名 (カナ)			全角で記入。
		ic: 氏名_ミドル ルネーム (カナ)			全角で記入。
	ic:氏名_姓名 (ローマ字)				半角、ヘボン式で記入。姓 (ローマ字)と名 (ローマ字) を半角スペースで接続。
		ic:氏名_姓 (ローマ字)			半角、ヘボン式で記入。
		ic:氏名_名 (ローマ字)			半角、ヘボン式で記入。
		ic: 氏名_ミドル ルネーム (ローマ字)			半角、ヘボン式で記入。

図 3 詳細データ項目

IMI の命名規則 (NDR) に従い、データ項目の日本語名はアンダースコア「_」で単語を接続している。

IMI の命名規則 (NDR) に従い、データ項目の英語名は英語名は単語の頭文字を大文字にして単語を接続している。

また、検索エンジンでの用語の標準化している Schema.org との関係も下表に整理する。利用した Schema.org の分類は、以下の通りである。

Thing > Person

ic:氏名		
Ic:氏名_種別	Type	
ic:氏名_姓名	FullName	Thing>Person>name
ic:氏名_姓	FamilyName	Thing>Person>familyName
ic:氏名_名	GivenName	Thing>Person>givenName
ic:氏名_ミドルネーム	MiddleName	Thing>Person>additionalName
ic:氏名_姓名 (カナ)	FullNameKana	
ic:氏名_姓 (カナ)	FamilyNameKana	
ic:氏名_名 (カナ)	GivenNameKana	
ic:氏名_ミドルネーム (カナ)	MiddleNameKana	
ic:氏名_姓名 (ローマ字)	FullNameRoman	
ic:氏名_姓 (ローマ字)	FamilyNameRoman	
ic:氏名_名 (ローマ字)	GivenNameRoman	
ic:氏名_ミドルネーム (ローマ字)	MiddleNameRoman	

図 4 英語対応、schema.org 対応

3. IEP 活用の流れ

3. 1 新規システム構築の場合

データ設計において、本 IEP の活用を検討する。本 IEP に対応することで、インターフェースのカスタマイズを最小限に抑えることができる。

データベース内のデータを詳細項目で記録して、入出力においては利用者に合わせた形で構築する。こうすることで、高い相互運用性と使いやすいインターフェースを両立させること。

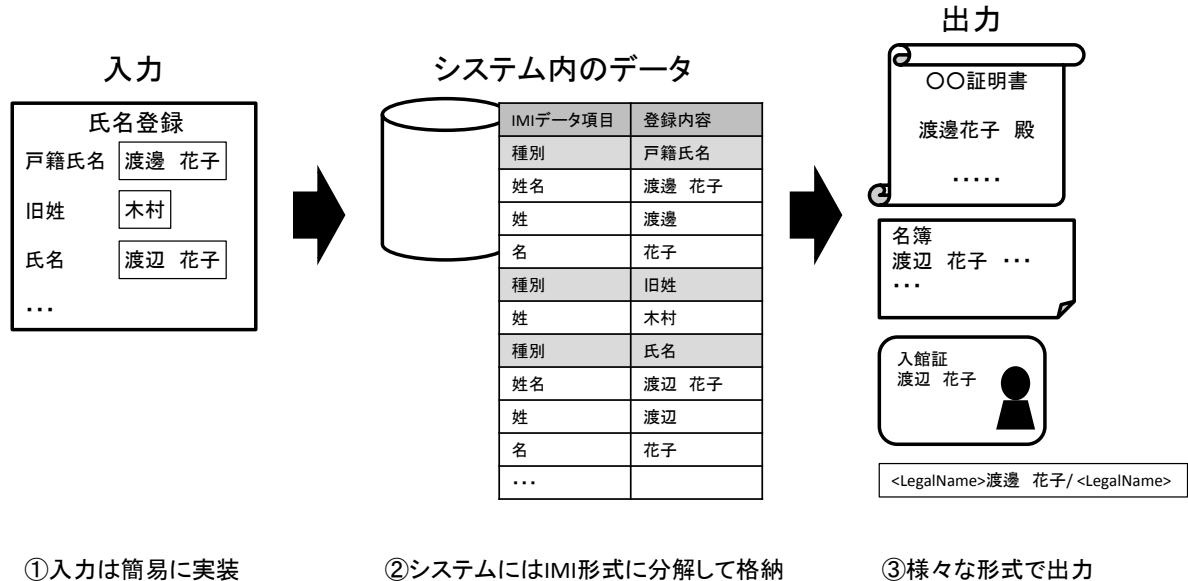


図 5 新規システムでの導入イメージ

(1) 手順 1 データ洗い出し

新システムで必要なデータ項目の洗い出しを行う。

(2) 手順 2 データ確認とサブセット作成

IMI の氏名項目データを見て、過不足を検討する。そして、IMI のデータのうち使用する項目のサブセットを作成する。

(3) 手順 3 データ実装方式の検討

画面やデータベースでのデータ実装方式を検討する。

3. 2 既存システムの場合

他システムとの情報交換や情報公開のためにデータのインターフェース設計（API を含む）が必要な時に、本 IEP の活用を検討する。本 IEP を活用することで、2 回目以降の変換作業の負担を大幅に減らすことができる。

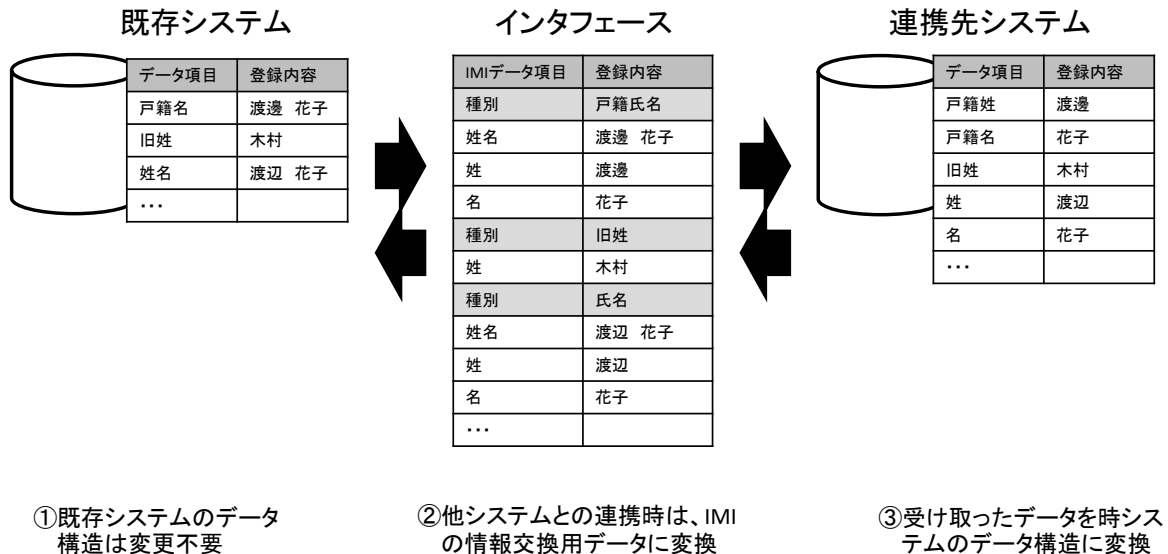


図 6 既存システムでの導入イメージ

(1) データ対応表の作成

自組織内でシステムに関するデータベースを持っている時には、IMI のデータ項目に対して対応表を作成する。

(2) 送信用情報交換用データセットに変換

情報交換のために、既存データを IMI データに変換する。一括してデータ交換用データセットを作る場合と、情報交換の都度リアルタイムで変換を行う方式がある。用途に応じて実装方式を検討する。

(3) IMI 形式データの受信と自組織のデータ形式への変換

データ連携先には、IMI 形式でのデータ送信を依頼する。その上で、IMI 形式で受信したデータを、自組織のデータ形式に変換する。

3. 3 注意事項

氏名の漢字表記は、使用する文字セットによっては正しく表示されないことがある。文字情報基盤の活用することで、このような問題を解決することができる。ただし、運用上必要がなければ、従来から JIS の範囲で運用しているシステムの対応文字数を文字情報基盤が対応する最大文字数に拡大する必要はない。